



建学の精神

聖坂学院は、キリスト教の精神を基盤とし、知的に障がいのある児童・生徒を対象に教育を行ないますが、個人々の個性に応じた指導を行ない、力を十分に発揮できるように育みます。心身の調和的な成長を図り、身辺自立や社会へ参加する力を育み、自分らしく豊かに生活できるような活動を展開します。

スクールモットー

神様に愛されている喜びの発露としての教育
神様からあずかっている賜を生かしあう教育



聖坂学院 校章・マーク
山百合は「神の愛」「人の愛」「平安」「清純」の象徴です。県花であると同時に、聖書の中では〈シャロンの谷〉（ヘブライ語で平安のこと）の百合として、愛する人の姿にたとえられています。

学校法人 聖坂学院

〒231-0862 神奈川県横浜市中区山手町140

TEL : 045-622-2974 FAX : 045-622-2923



創立

水上で生活する人々にとって子供の教育は悩みの種でした。1925年（大正14）の第2回国勢調査では、東京府の水上生活学齢児童数992人の内、約半数近くが学校へ行っていないという結果が出ました。

こうした状況下、元・陸軍一等看護官の山崎亮太郎は、学校に行かずに僻で遊んでいる児童を御茶の水川支流の掘割で見かけたことから、当局にその救済を訴えました。長年にわたる山崎の働きかけは、環境に恵まれない児童の教育を使命として設立された特殊学校〈東京市立芝浦小学校〉（のちの竹芝小学校）内に、1921年（大正10）水上学級の設置として実を結びました。このとき教諭として声がかかったのが、聖坂学院創立者の伊藤伝です。

一方、大人の水上生活者の生活改善も見過ごすことのできない問題で、荒川敬を中心とした回漕業界有志と東京水上警察署長 寺坂藤楠によって、1927年（昭和2）〈水上協会〉が設立されました。水上協会は京橋区（現・中央区）から月島第二尋常小学校仮校舎を無償提供され、理事長の寺坂が校長となって特殊学級は〈東京水上小学校〉として開校します。

児童の救護と教育の一切を行なった伊藤と運営経理を担当した寺坂との間にはしばしば対立がありましたが、キリスト教主義の教育について、特に強い反対を受けています。1932年（昭和7）高松宮が東京水上小学校を訪問したのを契機に、東京市による各種学校としての〈東京市立水上学校〉の設立が進められ、経営的な観点から伊藤もこれを容認し、東京水上小学校は廃校になりました。

伊藤は、横浜の地にも水上学校をつくることを決意。1942年（昭和17）7月20日、印度人商館を借りて〈日本水上学校〉が誕生。これが〈聖坂学院〉の端緒です。知的障がい児や超年児童を受け入れ、寄宿舎も併置。たびたびの移転ののちに、1948年（昭和23）11月現在地に安住しました。

1951年（昭和26）学校法人として認可され、3年後、養護施設事業は財団として分けて運営されるようになります。

水上生活者を取り巻く環境も変化しました。1960年代後半になると、コンテナをリフトで運ぶ効率的な積み降ろしに変わり、船上生活が禁止されたこともあって、僻も水上生活者も減少。歴史的使命を発展的に解消した日本水上学校は、1967年（昭和42）3月をもって閉校し、4月より新たな使命を受けて、横浜市内で初めての知的障がい養護学校、私立〈聖坂養護学校〉（小学部）が開校しました。

1985年（昭和60）高等部に専攻科を設置すると共に、高等部卒業生の厳しい進路先を心配した父母たちを中心となって、〈聖坂子供たちの将来をつくる会〉が結成されています。

創立の背景と歴史

聖坂学院の前身となる日本水上学校を創設した伊藤伝は、現在の山形県新庄市常盤町に、8番目の子供として生まれました。生糸生産の仕事をしていた父が人に騙されたことから家運が傾き、幼少期は家族離ればなれの生活を送りました。6歳年上の兄が一家の再興を図り屯田兵として北海道・釧路に志願、一家で移住したのは伊藤が10歳のときでした。

15歳になって勉学を志した伊藤は、東京・麻布の叔父一蔵を頼り上京。通信省電話交換手として働きながら学びました。当時、電話交換の仕事は、夜間は男性が行なう決まりだったため、苦学生が多く働く職場でした。このときの友人で『大菩薩峠』の著者 中里介山と連れ立って教会に行き、のちに日本基督ユニテリアン神学校に学んでいます。

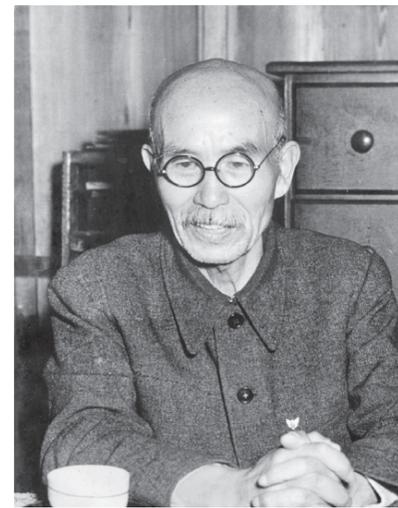
書籍20冊と鉄アレイ8個を持って旅をするという武者修行を行ない、途上で思うところがあって1901年（明治34）教員になりました。翌年、東京に戻り、麻布本村町の曹溪寺にあった麻布区代用慈育小学校でも教鞭をとります。どちらの学校でも、事前に地域の三十以上の学校を訪ねた上で決定したといいます。のちに陸軍志願兵として入隊。胸を悪くして現役免除となっています。1908年（明治41）から13年間、東京市鞆絵小学校で奉職。病気のため休職して、葉山に転地療養します。体調がほぼ回復したところに、水上児童教育の話が視学 成田千里からあったのです。このことが、伊藤が水上児童教育に献身した直接の動機となりました。熟考の上、すべてを捨てて、いまだかつて誰も試みたことのない水上児童の教育という仕事に献身することになりました。

のちに、伊藤は、「水上児童の教育という志も、自分で考えついたものではなく、神に頼る神よりの使命として与えられたもの」と言っています。

日本水上学校は、伊藤の東京水上小学校退職金1000円と愛宕小学校時代の教え子 岩垂好徳からの寄附1000円を基金として、また神田YMCAの早天祈祷会で捧げられた吉田清太郎からの献金をもって始められました。

国から買い取っていた敵産建物であったユニオンチャーチを、敗戦後に無償で返還するというつらい経験もありましたが、閉校の危機を伝える神奈川新聞の記事を読んで翌日に駆けつけた長谷巖や、アメリカ軍のジェンキンス軍曹と本国母教会の信徒といった多くの人に支えられて、困難を乗り越えてきました。

芝浦も横浜も、今ではウォーターフロントを標榜するおしゃれなスポットになっていますが、日本の高度経済成長を支えた水上労働者と、その子供たちの苦労は、この場所で起こった事実です。持てる財産をすべて売り払い、文字通り命を賭けて献身した伊藤の志は、時代が変わっても聖坂学院として形を変えて継承されています。



創立者 伊藤伝（1880～1955年）
日本水上学校をつかって、
水上生活児童の教育に献身しました。